

受賞へのメッセージ

作曲家三輪眞弘という彫刻

学長 関口 敦仁

音符記号が音を表す事はもちろん知っているし、楽譜が音楽を創造するテキストである事も、今はすでにわかっているつもりではいる。とはいえ、それらが構造的な関係性を持っている事を実感として理解したのは、最近になってからの事だと思う。

同僚である三輪眞弘を開学時から見て来たけれど、それは多分、横斜め後方からである事は確かだ。

残念ながら、僕には彼を作曲家としてきちんと正視できる能力を持ち合わせてはいない。

とはいえ、いつのまにか音楽が構造と直結していると感じられるようになり、またそれを楽しめるようになったのは、彼の活動を見られる環境に居たおかげだとも思う。

作曲家三輪眞弘の立ち姿は、彫刻で言えば、シャピロの作品のようなバランスを取るような立ち姿ではなく、ブランクーシでもなく、ジャコメッティのそれに近く、マンレイの彫刻作品のようでもある。日本的な作家の作品で例えれば、リ・ウーファンや高松次郎ではなく、比較すればイサムノグチのほうが近い。純視覚型人間の私にとっては、彼は最堅牢な金属で出来た真つすぐに伸びたワイヤー上の芯をもち、特殊な物質で出来た触手によって、まず届かないだろうと思われる地点の物語を掴んでいるように見える。その姿を正面から見ると、真つすぐに伸びた形はすこしだけ右側になだらかな弧を描いて、そよ風よりもゆっくりと揺れている感じ。そう思うと、たまに弦が弾けたように激しく動く音はするが、見ると微かに廻っている。

きっと、この文は「わからない。」と、彼にあっさり弾かれてしまうのだろう。

芸術選奨文部科学大臣賞（芸術振興部門）受賞おめでとう。

そして彼は文部科学省も指で軽く弾いてしまうのだろう。

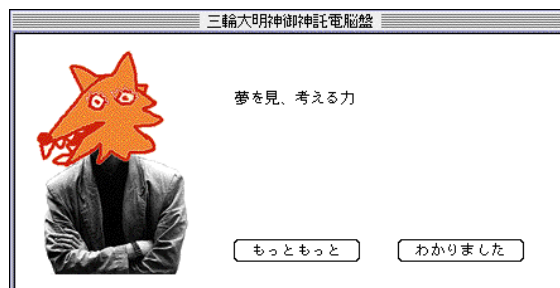
ペンッ！

三輪さん before IAMAS

赤松 正行

とあるレクチャーでホワイトボードに箱をいくつか描き、三輪さんが番号を打った。1、2、3、4... 手を止めておもむろに「これじゃいけませんね」と言いながら、番号を振り直した。0、1、2、3... 作品の構造を説明するのに、ゼロ始まりにしなければ気が済まない音楽家に初めてお会いした。同時に最初はイチ始まりであったことも人間臭いように思えた。かれこれ20年ほど前の出来事。

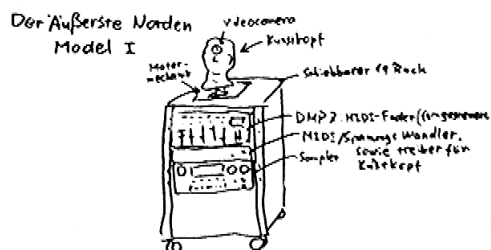
三輪さんが最初の著作を出版された時には、そのサポートを少しお手伝いした。その著作から拾い出したフレーズで今でも印象に残っているのは、「夢を見、考える力」。凡人でも夢を見ることはできるが、夢を考えることは難しい。しかも夢を考えるためには力がある。そう勝手に解釈した。これも三輪さんがIAMASに着任される以前、ドイツ時代の話。



その頃も三輪さんは左右色違いの靴下を履かれていたと思う。色違いの所以はご本人の弁も含めて諸説あるが、おそらく三輪さんが高校生の頃に一時的に局所的に流行したはずだ。その後ほどなく流行りは廃れたが、ドイツに渡った三輪さんには温存されたと邪推する。異国で色違いの靴下がどのような役割を果たしたのかは知らないが、色が揃うことはなかったらしい。

同じ頃に三輪さんがBBSを提案し、小さなコミュニティが生まれた。そこで提案されたのが極北一号。言わばテレ・プレゼンスとしてのリモート・ロボッ

トで、ダミーヘッド・マイクやムービング・フェーダを備えている。海外在住者が国内のライブに遠隔参加する大袈裟な構想。これはついぞ実現しなかったが、折に触れて同じ願望が浮んでいることに気づく。



やがて三輪さんは帰国され、IAMAS の教授として、日本の作曲家として活躍される。活躍と言うより奮闘かもしれない。その成果は夢を見て、夢を考え抜く力ゆえだと思う。三輪さんはイチ始まりであり、ゼロ始まりであり、左右色違いの靴下を履いている。きっとロボットも作られるだろうけど、それは宴会に参加したかっただけと嘯かれるかもしれない。勇気を与えていただいて、ありがとうございます。

受賞を祝い

齋藤 和正

三輪先生の創作についていつも感じるのは、その作品が言葉によって強固に体系化されているということです。それはよくある作品解説でも、ぼんやりとしたアーティストステートメントでもなく、作品の背景・構造・意図が、ときに”物語”の力を用いながら徹底的に論理化され語られます。けれどもその音楽体験は、思弁が音響化されたものではなく、構造（思想）が実世界にリアライズされたその現象としての音響を聴いているような不思議な体験で、それはいつも”自分には与りしれない秘術”を目撃したような感覚を伴います。「ありえたかもしれない音楽」という言葉の甘美な響きに魅惑され、クラクラとしたのが10年前。今思うとその衝撃は、甘美さ故のものではなく、私自身の音楽の概念の根本が揺さぶられ、リセットを余儀なくされたからなのだと思います。そしてこの10年間で「逆シミュレーション音楽」、「録楽」、「新調性主義」、「中部電力芸術宣言」など、止むこと無く言葉を変えながらやってくるその衝撃に、私は揺さぶられ続けました。それは

どれも普段は「(考え)ない」ことになっている部分を、露呈され、再考を促される、本質を問われるものでした。そんな問いを発し続ける三輪先生は、私にとって一番身近な実践者であり、見習うべき”背中”です（勝手ですが、）。この度は本当におめでとうございます。益々のご活躍をお祈り申し上げます。

芸術選奨文部科学大臣賞受賞によせて

前田 真二郎

これまで三輪さんは従来の音楽のあり方を疑いながら極めてユニークな作曲を続け、同時にそれらを言語化してきました。その創作の軌跡をたどると、自身の表現活動を社会に結びつけようとする強靱な意思を感じずにはいられません。オペラ『新しい時代』発表以後に開始した『逆シミュレーション音楽』の頃には、カウンター・カルチャーやオルタナティブに属する音楽を横目にみながら、現代音楽の領域に踏みとどまり、そこで発表することの価値を見極めながら、また、その領域を挑発しながら展開していました。これは私の解釈ですが「近代西洋音楽の最終形態のひとつとして提示するなら、然るべき領域で発表しなければならない」といった迫力が当時の三輪さんにはありました。三輪作品は「わかる人にはよくわかる」ように配慮されており、連続する作品群はコンセプトの強度を高め、同時にそれを明快に伝えてくれます。この『逆シミュレーション音楽』は2007年にアルス・エレクトロニカにてグランプリを受賞しましたが、これも今回の芸術選奨と同様に、ひとつの楽曲ではなく芸術活動に贈られたものでした。また、今回の授賞式の少し前に、3.11以降に福島県内の児童生徒が浴びる放射線量の上限基準を「文部科学大臣」の名において引き上げたことに対して「受賞を断るという判断も当然あり得るわけだが、今回は、そうはしないことにした。」と自身のHPに心情を掲載しています。このテキストは三輪さんの人柄を表しており、この判断に対しては多様な意見があったと思います。私は現代音楽領域に踏みとどまりながらギリギリのところで作曲を続けていた三輪さんを知っています。困難な役割を引き受けながらも真なる意味での変革を目指しての判断だったのだと疑う余地はなく、この受賞は我がIAMASの誇りであると受け止めています。